

研究動向

新しい家族のかたち

さくまゆみこ

本学では、現代を生きる女性に必要な「人間のちから」を育もうとしている。女子高等教育を担ってきた本学において、女性がどのように自らの可能性を育み、どのように家族を形成し、暮らしをつくり、社会の一員として生きていくかは、時代や社会がいかなる変容をとげようとも変わらない、教育・研究の重要な命題のひとつである。また、「人間のちから」を育むひとつの重要な基盤は家族体験の中にある。このプロジェクトは、その「家族」に焦点を当てて研究を行っている。

家族が血縁による結びつきを前提とするものであるという旧来の家族観から解放されて、血縁を越えた家庭的な共同体の構築の意味を考えると同時に、逆に現代における血縁のもつ意味も再度捉え直してみたい。共同研究の目的は、新たな家族のかたちとその可能性を探ること、新たな視点から今日そしてこれからの家族を展望すること、人を活かす家族のありようを具体的な作品や営みの中に探求すること、研究成果を研究と教育の共同体である本学の教育活動にも反映すること等である。

このプロジェクトでは、研究分野の違う者が集まって、それぞれの視点で今の社会に必要とされる「新しい家族のかたち」を追求し、意見交換を行っている。所員及び客員研究員と、それぞれの研究テーマは以下のとおりである。

さくまゆみこ（子ども学科教授）「児童文学にみる新しい家族のかたち」

横堀昌子（子ども学科教授）「非血縁の家族形成のかたちと養育の営み」

宇田美江（現代教養学科准教授）「家族の変

容と女性のキャリア形成」

鈴木宏枝（白鷗大学准教授）「英米のYA文学にみる家族像の変遷」

私たちは、2014年度に研究発表会と、外部から講師を招いての講演会を計6回開催した。

研究発表会は以下の4回であった。

1) 横堀昌子「非血縁の家族形成のかたちと養育の営み」(7月21日)

日本では国の方針として社会的養護の施設全体に関し小規模ケア（ケア単位の小規模化）を推進することで「家族的養護」に近づけるとともに、里親やファミリーホームなど子どもを家庭に委託する「家庭養護」を推進しようとしている。国連・子どもの権利条約や国連・オルタナティブ・ケア・ガイドライン（代替的養護に関する指針）等が打ち出しているビジョン、国連・子どもの権利委員会から日本への勧告を参照すると、里親等による地域ベースの家庭養護（“family-based care”）への委託が諸外国よりも圧倒的に低い日本の課題状況があることが示された。

また、発表者の体験した里親家庭・グループホームでの生活や施設でのケア体験、また「ケアする人のケア」をめぐる課題等を通しての考察が語られた。6歳までの子どもが新しい家族を得る特別養子縁組制度の意義、諸課題も指摘された。非血縁家族による養育を成立させる条件は何か、家族意識は何によって生まれるかをめぐって研究を進めたいとの方向性が示された。

2) 鈴木宏枝「ファンタジーの中の家族」(11月

10日)

主にイギリスを中心とした19世紀以降のファンタジー文学の中では、主人公に対して、家族が調和よりもむしろ混乱をもたらしていること、血縁に拠らない共同性のほうが主人公を援助していることについての概説があった。その上で、本プロジェクトで扱うフィリップ・プルマン作「ライラの冒険」シリーズの3作品(『黄金の羅針盤』『神秘の短剣』『琥珀の望遠鏡』)について、主人公の特異な家族像を分析し、信頼できる関係が人間ではない者同士や時空の異なる世界にいる者同士の間で結ばれていることが考察された。

3) 宇田美江「ワークライフバランスと在宅勤務」(12月1日)

働き方革命のひとつとも言えるテレワークの中の在宅勤務に焦点をあて、家族が変容する中、個人のワークライフバランスを実現する在宅勤務の課題と可能性が、特に女性の就業という点から考察された。発表者の研究の興味と方向性は、ワークライフバランスを目指した新しい働き方の模索にあることが述べられ、いくつかのインタビューによるケースが紹介された。

4) さくまゆみこ「アメリカの女性作家ジャクリン・ウッドソンの作品にみる新しい家族」(2月6日)

ジャクリン・ウッドソンはアフリカ系アメリカ人の女性で、レズビアンであることをカミングアウトしており、近年大きな児童文学賞を立て続けに受賞している作家である。英米のリアリティ・フィクションの作品にどのように家族が描かれてきたかを概観したうえで、ウッドソンの絵本作品や物語作品を時系列的に取り上げながら、それぞれの作品における家族像の変遷やこの作家ならではの特徴についての考察がなされた。

また、外部講師を招いての講演会は、以下の2回であった。

1) 芹沢俊介氏(評論家)「親子になる」ということ」(10月20日)

最初に2014年7月に起きた佐世保女子高生殺害事件の16歳の加害者少女のよるべなさや孤独について言及され、保護者は「二重の親」になることが必要であるという指摘がなされた。「二重の親」とは、「生物的な親」とどまらず、「受け止め手」としての親へと移行できた際に成立すること。子どもの側からみると「受け止められ欲求」を表出し、それが「親」によって受け止められたときに初めて安定感が実現されるという。「親」がこの移行の部分を選びとらなかった場合は、子どものいのちはたちまち存続の危機に陥るのだが、そこを理解している親は多くないという現実がある。また里親・養親や施設(乳児院・児童養護施設)職員の最重要課題は、この「受け止め手」としての親になることであるという指摘もされた。母性は生物学的な母親でなくとも、その子の「受け止め手」を引き受けようとするところなら、どこでも生まれ、発揮されるという考察についても語られた。

芹沢氏からは、新しい家族を考えるうえでカギとなる「親」のあり方について、親子とは何かについて、また非血縁の家族の可能性についても多くの示唆をいただいた。

2) 北村有紀氏(株式会社NTTデータ e-コミュニティ事業部課長代理)「ワークライフバランスと在宅勤務(テレワーク)」

NTTデータでは、出産・子育てを機に会社を辞める社員が多かったのだが、仕事を辞めずに企業で成果を出しつつ柔軟な働き方ができるよう、テレワークという形態を最初はトライアルで実施し、やがて本格導入につなげていった。その中で出てきた課題を克服するために、社員の意識改革、情報共有、仕事の見える化が実施され、その結果、通勤に関する負担が軽減し、家族とのコミュニケーションが促進され、生産性の向上や省エネなどにもつながっていった。そうした変革を推進してきた中心人物の一人である北村氏からご自分の体験を通しての具体的なお話がうかがえたことは、女性の働き方や新しい家族を考える上で大いに役に立った。

2年目にあたる今年度も、各研究員のテーマに基づいて研究を展開し、資料収集やその分析を進める。家族のかたちとその変容について、既存の研究や作品や実践例を検討し、共通理解

を深めていく。研究会や講演会も開催しながら議論を重ね、初年度にとりかかった各自のテーマを深めていく予定でいる。